

説教 『神の他者として創造された』 山本 護 牧師
聖書 詩編 95:4~7 / エフェソの信徒への手紙 5:13~14

八ヶ岳伝道所周辺の野道を歩き、柔らかい秋の光の中で陶然と立ち尽くす。「ああ、俺は創造されたのだな」と実感した。何を今さらなのだが、被造物である自然と人間は、何が同じで、何が違うのか。「海も主のもの、それを造られたのは主。陸もまた、御手によって形づくられた(詩編 95:5)」。確かに自然は創造者の片鱗であろう。続いて「わたしたちを造られた方、主の御前にひざまずこう(95:6)」と詠われるが、人間は自然と違ってそのまま神の片鱗ではありえない。詩人は「主はわたしたちの神、わたしたちは主の民、主に養われる群れ、御手の内にある羊(95:7)」と語り、「今日こそ、主の声に聞き従わなければならない(95:7)」と戒める。言い換えれば「聞き従わない」神の民を暗に示している。

あるユダヤ神秘思想は、人間の被造物性を次のように開陳する。神は宇宙の隅々を満たしていたが、御自分ではない「他者」を創造しようと、一步退かれて自らを収縮された。虚が生じたその隙間に、「他者としての人間」が創造された。こうしたイメージで人間の特殊な被造物性を説明している。なるほど自然には不合理や矛盾はないが、私たちにはそれがある。自然には葛藤や反逆はないが、私たちにはそれがある。人間であることの徴つまり罪が、神の片鱗である自然と、私たちとを隔てている。

秋の光の中、「ああ、俺は創造されたのだな」という感触は何に由来するのか。人間は隙間に創造された。だから周囲には自然という神の片鱗が満ちている。私たちはそれを呼吸し、飲み食いして生きている。人間は「神の他者」だが、己が生命の根源は神の息吹によるものだし(創世 2:7)、「わたしたちを造られた方(詩編 95:6)」の片鱗によって命を保っている。人間は、隙間に創造されたがために、創造者たる神とむかい合いうる。自然のごとくに神と密着しない、悲しい、独立した他者なのだ。

「すべてのものは光にさらされて、明らかにされる(エフェソ 5:13)」。詩人の八木重吉は「この明るさのなかへ／ひとつの素朴な琴をおけば／秋の美しさに耐へかね／琴はしづかに鳴りいだすだらう」と記した。これは想像しての言葉ではなく、重吉のリアリティだと思う。旧約の詩人も、パウロも、大正期のキリスト者詩人も、神の光に照らされた自然と人間を、実感から、柔らかく、厳かに語っている。

「明らかにされるものはみな、光となる(5:14a)」。人間は「神の他者」として創造されたがゆえに罪を負った。しかし他者であるがゆえに、己が被造物性を知り、神の光に与りうる。光に与る私たちは神の片鱗たる自然では終わらない。「それで、こう言われている。〔眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる〕(5:14b)」。パウロが引用した詩の出典は不明だが、被造物としての命に限定されないキリストによる再創造を讃えている。

「すべてのものは光にさらされ、明らかにされる(5:13)」。私たちの命が、愛が、信仰が、罪が、背信が明らかにされる。私たちは「神の他者」として創造されたのだから、皆それぞれに幾分か凸凹はあろう。しかしそれらが比較され、測定されて、救いと滅びにふり分けられるような、みみっちい話ではない。キリストの光に照らされ、私たちのすべてが明らかにされ、自然な死をも超克する(5:14)。



【おまけのひとこと】

寒々しい地平に私は立っている 神と密着せず 隙間風を感じながら 寂しい 一人の他者として
この隙間風を過不足なく言葉にしよう 言葉それ自体に脚色があるゆえ 濁り具合も勘定しながら